

Title	「感覚質」問題について : G.バシュラールの「現象工学」の観点から
Sub Title	Of the problem of "Qualia" : from the viewpoint of Bachelardien "phenomenotechnique"
Author	河野, 哲也(Kono, Tetsuya)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1998
Jtitle	哲學 No.103 (1998. 12) ,p.1- 20
JaLC DOI	
Abstract	"Qualia" provides one of the most difficult questions for the philosophy of mind, since it seems impossible to explain how a phenomenal-sensible quality like color is produced from colorless electronic-chemical processes in a brain. The purpose of this paper is to propose a causal theory of qualia affirming that a qualia is causally produced by some brain state, and thereby "naturalize" qualia in a certain sense. In order to do that, we must, on one hand, eliminate any anthropomorphic implication from the concept of causality, and, on the other hand, abandon the classical concept of matter and substance to fill the conceptual gap between the mental and the physical. We first examine the concept of causality. We distinguish the ordinary concept of causality (1) and the logical concept of causality expressed by counter-factual conditional (2). We use the concept of causality only in a meaning (2), when we explain the relation between brain and qualia causally. We next interpret the philosophy of science of Gaston Bachelard in order to adopt his theory to the problem of qualia. He criticized the classical concept of matter or substance, and affirmed that far from being reducible to a single level, reality involves a hierarchy where lower level structures produce a quality in a higher level. We show that the same can be said about the relation between brain and qualia. Finally, we conclude that we can maintain a causal theory only if we use the logical concept of causality and reject the classical presupposition of substance.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000103-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000103-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 「感覚質」問題について：

G. バシュラルの「現象工学」の観点から

河 野 哲 也\*

## Of the Problem of “Qualia”:

From the Viewpoint of Bachelardien “phénoménotechnique”

*Tetsuya Kono*

“Qualia” provides one of the most difficult questions for the philosophy of mind, since it seems impossible to explain how a phenomenal-sensible quality like color is produced from colorless electronic-chemical processes in a brain. The purpose of this paper is to propose a causal theory of qualia affirming that a qualia is causally produced by some brain state, and thereby “naturalize” qualia in a certain sense. In order to do that, we must, on one hand, eliminate any anthropomorphic implication from the concept of causality, and, on the other hand, abandon the classical concept of matter and substance to fill the conceptual gap between the mental and the physical.

We first examine the concept of causality. We distinguish the ordinary concept of causality (1) and the logical concept of causality expressed by counter-factual conditional (2). We use the concept of causality only in a meaning (2), when we explain the relation between brain and qualia causally. We next interpret the philosophy of science of Gaston Bachelard in order to adopt his theory to the problem of qualia. He criticized the classical concept of matter or substance, and affirmed that far from being reducible to a single level, reality involves a hierarchy where lower level structures produce a quality in a higher level. We show that the same can be said about the relation between brain and qualia. Finally, we conclude that we can maintain a causal theory only if we use the logical concept of causality and reject the classical presupposition of substance.

\* 防衛大学校人文科学教室助教授

## 1. 「感覚質」という残された問題<sup>(1)</sup>

「感覚質 (qualia)」の問題は、心身関係論にとって、古典的であると同時に残された重大な課題のひとつである。感覚質とは、文字通り視覚や聴覚、触覚などに与えられる感覚の個性的な質感のことを言う。近年の心身論では、再び意識の問題に関心が集まっているが (Metzinger, Tye), トマス・ネーゲル (Nagel:260f.) などは、感覚質を備えていることこそが、心あるいは意識の本質的特徴であり、それは物理的説明や機能主義的説明が、いかにしても取り逃がしてしまうような特徴であると主張する。実際、感覚質はこれまでやっかいな問題を引き起こしてきたのである。

すでに古典的な知覚の因果説にとっても、それは躓きの石であった。因果説によれば、脳の物理的過程が原因となって心的な感覚が生じる。この説によれば、色のない脳内の電気パルスが突如色彩を「生み出し」、味のないパルスがなぜか個性的な味の感覚を「生み出す」のである。しかし、物理・生理的な記述に徹するならば、その記述のなかにはどこまでいっても感覚質など現れない。ここから、因果説は、物が突然心に変化するのかのとき奇妙な考えであるとして批判されてきたのである。

また、物理的な脳状態と心的状態を同一とする説にしても、感覚質と物理的なもののあいだに横たわる溝をうまく埋められない。脳状態と心的状態が (タイプのでもトークンのでもよいが) 対応するとしても、脳はいかにしてもブヨブヨした物体であり、そこには主観的に経験される「青さ」もなければ、「よい香り」も見当たらない。脳状態と心的状態は、とても「同一」と呼べる基準、すなわち場所・時間・性質の共有という基準を満たしていないのである (土屋:26f.)。

あるいは、感覚質は脳の状態によって「実現される」とする考えがある。もちろん、そこで問題となっているのは、脳を満たしている諸物質そのものではなく、その細胞の結合構造やパターンであろう。しかしそれで

も、感覚質の困難は変わらない。なぜなら、どうしたらそうした構造なりパターンなりから、味や音の独特の感じが生まれる（実現される）のか、やはり両者の溝が埋まらないように思えるからである。信原はこの困難を以下のように述べている。「神経細胞はお互いに興奮を伝達しあいながら、様々な活性値を取る。このような活動をどのように抽象化し、どのようにより高次のレベルで把握すれば、感覚質が得られるのか。神経細胞の活動から感覚質に至る道は全く閉ざされているように見える（信原:229）」。

我々は、神秘主義者でないかぎり、生命の進化のある地点で、感覚を含む意識が発生したであろうことや、覚醒にはある種の脳興奮が必要なことを認めるだろう。脳に化学物質を投与したり外科手術をすることが、心的状態の変化を引き起こすことも認めている。けれども、一体いかにしたら、百数十億ものニューロンのかたまり、あるいはその活動の結合から、「青」や「猫の毛のふわふわした感じ」といった感覚質が生じるのであろうか。物体である脳と感覚質の間にあるこのギャップをどのようにすれば埋めることができるのだろうか。これが感覚質が提起する問題なのである。

本論の目的は、この問題を解決するための若干の提案を行うことにあり。私の最終的な意図は、感覚質を弱い意味で「自然化」することにある（それを「自然化」と呼べればの話だが）、感覚質は脳状態から因果的に生じると主張したい。しかしながら、これまで述べてきたように、我々は、「感覚質は脳状態から生みだされる」と言うことにある種の概念的な違和感を覚える。本論で試みたいのは、この概念的な「違和感」をいささかなりとも減じることである。

しかし、そのためには、信原が指摘するように、心のみならず物や物質に関しての概念を変革する必要があると思われる（信原:237-8）。そこで以下に、まず、感覚質を「自然的」に説明する際に用いられる因果概念について検討し、ある意味での因果説は心身関係の説明として問題なく受け入

れられていることを示したい。ついで、ガストン・バシュラルの「現象工学 (phénoménoteknikue)」という考えを紹介し、それを脳と感覚質の関係についての説明に応用することを試みたい。彼は、古典的な実体観・物質観を批判し、「工学的非実体論」とでも呼ぶべき立場を提起しているが、これは物と心という従来の強すぎるコントラストを緩和してくれるであろう。

## 2. 因果説の検討

先に述べたように、因果説は、脳内の物理的状态によって感覚・知覚が生じるとする説である。この説の問題は、色のない電氣的なインパルスが、脳内で突如色彩を「生み出す」という点にある。問題は事実的なものでなく概念的なものである。以下に、なぜ心身関係を因果性で説明することに違和感を感じるのかを分析し、その違和感を除去することを試みたい。

因果性とはどのような関係であろうか。まず、因果性が、大変曖昧で日常的な概念であることを認めなければならない。すでにラッセルやライヘンバッハは、それがなんら科学的な概念ではないと指摘していた。ラッセルによれば、従来因果性によって表現されていた定式は命題関数によって代置可能であり、それは関数概念が発達していなかった時代の遺物にすぎないのである (Russell:207-40)。また、ライヘンバッハにとって、因果性とは、「もし……ならば、……である」という条件文で置き換えられる関係に他ならない。例えば、「マッチを擦るならば、火がつく」といったようにである（ただし、対偶が成り立たないので実質含意ではない）。よって、科学的記述には因果概念は不要であるとして、ライヘンバッハは次のように書く。

原因は結果と、一種の紐のような物で結ばれているとか、結果は原因の

後におこるべく強制されるのだ、といった考えは、擬人主義的なものの見方にその根源があり、そのような考えをなしにすませることができるのである (Reichenbach:152).

現在では、因果性は、「反事実的条件文 (反実仮想)」(「もし、[ 事実に反して ]……でなかったら、……でなかったろう」) によって、論理的に定式化される傾向が優勢であると思われるが (Mackie, Sosa & Tooley), ここではそうした論理的定式化の詳細に触れる必要はない。

しかし、極めて古典的で日常的な概念である因果性には、中性的な論理的定式や関数概念では置き換えられないような含意がある。つまり、原因が結果を「生み出す」とか、原因は結果を「導く」といった、純粹の論理的概念を越えた意味がそこにはまわりついているのである。いわば、原因は、「生み出し」、「命じ」、「導き」、「強制する」ものであり、結果は、「生み出され」、「従い」、「指導され」、「受け入れる」ものである。このように、因果概念が擬人的意味をまわっているのは、アンスコムやウリクトが指摘するように、それが行為概念に出自を持っているからだと思われる。アンスコムは、因果関係を表現する文章が、行為の動詞によって接続されていることを指摘した (Anscombe:133-147)。また、ウリクトは、『説明と理解』のなかで、因果性を行為に基づける議論を全面的に展開している。

彼らのように因果性を行為の概念に近いものとして理解する仕方は、実は、歴史的にはオーソドックスである。日本語にも、「因果応報」という言葉があるように、原因の概念は、もともと、ある変化の帰属先や責任を問う概念である。プラトンが原因を意味する言葉として用いた「アイテイア」も、原因であると同時に「責任」の意味を持っていた。古代ギリシャ人は、刑法および正義に由来する観念をたよりに、自然界おける因果性の概念を作り上げたのである。また、近世以降も、因果概念が「能動力」や

「努力」の概念と緊密に結びついていたことは、ロックやメーヌ・ド・ビランに明らかである（河本・一ノ瀬：56-98）。因果概念が行為概念に還元されうるかどうかはここでの問題ではない。指摘しておきたいのは、因果概念の「擬人性」にこそ、多くの哲学者が心身の因果説を奇妙と感じる理由があるのではないか、ということである。

この点をもう少し考えてみよう。そこで我々は、「生み出す」「生じさせる」といった意味を持つ素朴な因果概念を「因果性(1)」と呼び、反事実的条件文と同一視され、論理的な表現へと脱色された因果概念を「因果性(2)」と呼ぶことにしよう。この区別に基づいて因果説を考えると以下のようになる。たとえば、今、我々に赤い色が見えていると想定してみよう。それは、脳にしかじかの興奮が生じたときであろう。そこで、因果説は、脳の興奮パターンから赤の感覚が「生みだされる」と主張する。ここでは、確かに、「もし、その脳興奮が生じなかったならば、赤感覚は生じなかったであろう」といった因果性(2)で表現される状況が成立している。使用する因果概念をこの(2)にとどめておくかぎり、その説明は一種の「事実」として受け止められ、それが問題視されることはないと思われる。しかし、それを因果性(1)の意味に取り、「脳から赤感覚が生み出される」と表現すると、ただちに概念的な違和感が生じるのである。そこで、私が提案したいのは、意味を(2)にとどめて、脳と心の因果性を主張することである。

しかし、このように認められる因果性を(2)に限った場合、それは、感覚・知覚の成立条件を述べたこと以上にはならない。それが仮に一種の因果説であったとしても、それだけで感覚質を「自然化」したことになるだろうか。つまり、「自然化」と呼ぶには弱すぎる主張なのではないか。このような反論が予想されるだろう。しかし、私が主張したいのは、これ以上強く心身関係を自然化するならば、やはり直ちに先に述べたような概念的違和感が生じてしまうということである。これについては後に触れるこ

とにする。また、このような「自然化」をしたところで、感覚質が物体・物質と同じ次元に属すると考えることには、やはり違和感を持つ人も多いと思われる。それは、「物質」の概念の意味するものが「感覚」の意味するものとあまりに異質で齟齬をきたしており、それらを因果関係で結びつけることに躊躇を覚えるからであろう。そこで次に、古典的な「物質」や「実体」の概念を検討し、これらの概念を放棄することで、感覚質の自然化の可能性を探ることにする。

### 3. バシュラールの現象工学

上に述べたように、私が批判したいのは、脳が物理的存在（物質ないし物体）であるがゆえに、何かしっかりとした実体であり、一方、感覚質の方は幻のような捉えどころのない現象だ、とする対比である。この実体と現象の極端なコントラストが、感覚質問題のひとつの元凶であると思われる。ところで、ガストン・バシュラールは、独特の工学的（操作的）非実体観を提起したが、私はこの考えを応用して脳と感覚質の関係を理解したのである。まず、彼の実体論に対する批判を見てゆくことにする。

実体 (substance) とは、現象を支える基体と定義される。それは、現象として現れる述語（性質）の背後に、それを支える主語（実体）がある、という考えである。しかし、バシュラールによれば、現代物理学や現代化学は、こうした我々の思考にしぶとく居座る主語－述語的な実体論に変革をせまっているのである。

例えば、古典的な実体論的思考によれば、実体の性質は一次性質と二次性質に分けられ、一次性質のみが内在的・本質的に実体に属し、二次性質は関係的・偶有的な性質と見なされる。しかし、現代科学では、このような区別は成り立たず、延長や質量といった一次性質も自存的な意味を失っている。例えば、静止物体と運動物体を比較すれば、運動している物体の長さは運動方向に縮む。ある物体は、静止している状態より運動状態の方



が質量が大きくなり、光速に近づけば無限大に近づく。あるいは、原子も、エネルギーの非連続的な吸収あるいは放出によって、それ自身が変化する。したがって、一次性質も、二次性質と同様に関係のないし文脈的な性質であり、その区別は恣意的なのである。

逆に言えば、あらゆる性質は文脈構造によって成立しているのだから、単一の実体の属性として理解できるものではない。例えば、大気のイオン化に関する研究は、空の青さを説明するのに、その重点を物質から輻射に移行させた。厚い大気層は青いのだと言って、輻射に帰せられる性質を、前世紀に物質に帰せられた質と同じようなものだ、と主張することはすでに虚しい。ここでは、現象（性質）と実体の結びつきはすっかり緩んでしまっているからである (NES:78f.)。「実体」とは、「実体化されたもの」のことであり、「論理上の主語である名詞が実体となるのは、その諸性質の全体が一つの役割によって統一されたときである (NES:21)」。

表面に現れた質の次元が、深部にある実体的本質の次元に依存している、とする我々の臆見はきわめて根が深い。しかし、バシュラールによれば、こうした考えでは、新たな現象が「合成 (composition)」によって生じる、という事態を理解できないのである。例えば、塩素とナトリウムを化合すると、それぞれのもとの性質を失い、(海)塩が構成される。しかし、この現象を前にしても、素朴原子論に執着するヘルムホルツなどは、原子論が説明するのはア・プリオリに原子自身に付与された性質だけに過ぎない、と繰り返したという (IA:76f.)。しかし、化学的性質や機能を、構成要素である原子に帰属させるならば、原子はあらゆる性質を担わなければならないだろう (IA:56f.)。これは原子に付与される性質を膨大にしてゆくだけの話であり、「すべてのものは最初にあった」という主張以上のものとはならないだろう。

全く新しい性質を生み出す合成の不思議さは、なにも複合的物質の化学に限ったものではない。単純とされていた実体においても同様である。

バシュラールは、元素について以下のように言う。

個々の単純な物質〔実体, substance〕は、事実、下部構造を受け入れたのである。特徴的なことは、この下部構造が研究される現象の本質とは全く異なった或る本質を開示してみせたことである。或る元素の化学的性質を電子的粒子〔corpuscules électroniques〕の組成から説明することによって、現代化学は新たな認識論的切断をつくりだした。一種の非化学が、化学を支えるために構成されたのだ (PN:93)。

電子は、そのうちに電子が説き明かすいかなる化学的特性も持たないばかりでなく、力学的・幾何学的特性も不安定である。化学現象とそれを可能にする下部構造（電子組成）は、実体論が想定するような「実体－現象」の関係にはない。合成された性質のすべてを構成要素に帰属せしめるなら、合成は存在しないに等しいことになる。したがって、現象とその下部構造のあいだには質的な飛躍あるいは断絶が存在し、それはあらゆるレヴェルでそうなのである。つまり、バシュラールによれば、実在は単一のレヴェルに還元できず、「実在は薄い幾重もの層をなしているのである (PN:83)」。このバシュラールの発想は、いわゆる「創発性 (emergence)」やホワイトヘッドの「合生 (concrescence)」の概念に近いと言ってよいであろう。もちろん、電子も、核も、原子も、分子も、あるいは、天体も、星雲も、同じような仕方で実在しているわけではない。むしろ、為すべきなのは、それぞれの次元の存在を確定できる方法を明示することである。

諸分野の混同を禁ずることで、或るひとつのレヴェルで論議することができるのだし、或る一つのレヴェルにおいて、存在を決定するのは方法であることを容易に示しうるのである。有機化学の初期には、合成は分

析の正確さを検証する役にしか立たない、ととかく考えられがちであった。現在ではむしろ逆である。あらゆる化学的物質は、再構成されてみなければ本当には明確化されないのだ。諸機能の階層的秩序をわれわれが理解できるのは、合成によってなのである。[……]合成による現実化[réalization]だけが、物質[substance]の諸機能の一種の階層秩序を決定し、科学的な諸機能を相互に接合することができるのである。(Ibid., 83).

このように、バシュラールにとって、科学的対象とは、直接に与えられた現象ではなく、複雑な関係の総体として再構成された現象、いわば現実化された現象なのである。よって、科学的観察とは、実在を鏡のように写して記述することではない。それは、実在を単に「示す(montrer)」のではなく、一連の手続き、例えば、前もっての図式、観察のプラン、先行する主張などによって構成的に「証明する(démontrer)」のである(NES: 19)。観察とは、対象を再構築して示すことである。ましてや、実験においては、現象は、区別され、篩いかけられ、器具や装置の鑄型に流し込まれ、器具の観点から生起させられる。現代科学の科学的現象は人が装置を働かせる瞬間にしか始まらない。現象はいわば「装置のコギト」の現象なのである。観察においても実験においても、科学は出来合いの対象を見つけるのではなく、対象を工学的に（決して観念的にではなく）「作り出す」とすら言ってよい。ここから、バシュラールは、科学とは現象を記述する学ではなく、それを工学的に構成する「現象工学(phénoménoteknique)」である、と主張する。

合理的研究のこうした多くの成功例を前にするなら、われわれの精神がみずから認め、そして活性化する場としての本体[noumène]を、現象の下に置くことをどうして禁じえよう。この本体は形而上学的な単純な

公準でもないし、〔数学と物理学の〕集結の規約的な記号でもない。われわれはよく考えてみれば、そこに複雑な構造を見いだすであろう。[……]このヌーメノロジーは現象工学を明らかにする。現象工学は、新しい現象を単に発見するだけではなく、それを発明するのであり、一から十まで構成する技術だからである (NM:22f.)。

現象工学<sup>(2)</sup>は現象学を延長する。概念は、それが技法的になり、現実化の技法がともなうにつれて、科学的になる (FES:85)。

つまり、現象工学とは、あるレベルの（諸）対象を操作して、そこに「複雑な構造」を成立させ、それによって高次の現象を生起させる技術のことである。科学とは、根本的に工学的・操作的なものであり、実在の究極の構成要素の探求、といった科学的努力も、ある現象を工学的に出現させるという操作的な意図から理解されなくてはならない。このバシュラールの考えは、素朴実在論を拒否するという意味では、反実在論的であるが、同時に、存在を観察や知覚に基づけようとする現象主義的ないし実証主義的な反実在論でもない。それは、世界を操作的・工学的に理解しようとする工学的非「実体」論と呼ぶべき立場なのである（金森:74-75 参考）。上で見たように、バシュラールが「合成」について語っていたことは、確かに「創発性」やホワイトヘッドの「合生」の概念に近い。しかし、その間には注意すべき相違もある。「創発性」や「合生」が存在論的・形而上学的概念なのに対し、バシュラールの「合成」は、あくまで、こうした彼の操作的・工学的な立場を反映した概念だということである。

#### 4. 感覚質と身体の現象工学

以上、バシュラールの非実体論と現象工学を見てきたが、ここで、脳と感覚質の関係についての議論に戻ることにしよう。私は、感覚質とは、身

体（とくに脳）に「複雑な構造」を成立することで生じる「合成」された性質であり、また、それは、その構造によって「因果」的に生起させられる現象だと主張したい。

もう一度、感覚質について考えてみよう。感覚質は、直観的に単一のものとして与えられる。そこで気がつくのは、我々は質自体を操作の対象とすることはできない、ということである。例えば、硬いものを柔らかくするときには、「硬さ」それ自体に働きかけることはできない。我々ができるのは、あくまで、その硬い「物」を、こねるなり、叩くなり、暖めるなりして、その「物」の方に手を加えることなのである。眩しさ自体に我々は手を加えることはできない。できるのは、陽の光を遮るように、ブラインドを下ろすことであり、眼を細めることであり、サングラスを掛けることである。ここから、感覚質は、生起したりしなかったりする不確かな現象であり、それを担う実体が一方で存在するということになる。しかし、指摘しておきたいのは次の二つの点である。

ひとつは、ここでは感覚質を担う実体と考えられているものとは、実は、それを操作することで感覚質を発生ないし変化・消滅させることができるようなものであり、つまり、それは感覚質の原因のことなのである。第二に、しかし、ここでも、ある性質の原因を単純にひとつの実体へと帰属することはできないことである。甘さを生じさせるためには、「最初から甘いもの」を口に入れる以外にも、苦いものをいったん含んでおいてそれを洗い流したり（一種の残像効果）、神経に電氣的刺激を与えたりすることによっても可能である。同様に、赤の感覚を光のある範囲の波長と簡単に同一視することもできない。コントラストや残像効果などで赤の感覚を生じさせることができるからである。したがって、感覚質は、何か単にひとつの実体の性質なのではなく、バシュラールの言い方を借りれば、ある「複雑な構造」のもとで成立しているのである。とするならば、感覚質は、生身の身体という器具・装置を使った一種の「現象工学」的な過程に

よって発生すると言いうるのではないだろうか。逆から見れば、感覚は現代科学よりも少ない種類の性質の分類しか与えないのだから、我々の身体は限定された現象工学的実験器具であるとも言えよう。

では、この現象工学的発想のなかで、脳をどのように位置づけたらよいであろうか。脳という物体に何らかの物理的操作（化学的、電氣的、何でもよいが）を加えるならば、通常感覚や知覚に伴う身体外部の条件（例えば、物が光を反射して眼に当たる等）を考慮せずに、ある感覚質を発生できるかもしれない。この意味では、脳が感覚質の原因と言えるであろう。だが、やはり、このときの脳とは、通常知覚とは異なる仕方であるにせよ、操作を受ける対象である。また、その操作を受ける脳とは、「物」あるいはひとつの「実体」としての脳ではない。感覚質の発生において問題なのは、すでにさまざまなところで指摘されているように、脳のいわゆる物としての性質ではなく、その細胞活性のパターンであり構造である。したがって、感覚質は、脳というひとつの「物体」の形容詞となるような性質ではない。また、確かに、脳細胞活性の「複雑な下部構造」が成立したときに、感覚質は生じるであろう。しかし、これは何も、我々が日常、感覚質を生じさせるときに行っていることと、根本的に違うわけではない。そこにある違いといえば、我々は、ある感覚質を生じさせるのに、普通は脳に直接（しかも医学的・生理学的方法で）働きかけずに、そのような脳状態になるように、身体外部の事物に働きかけてそれを達成する、ということに過ぎないのである。我々は、日常的には外界を一旦介して脳を操作する、と言えよう。

もちろん、知覚というものは、そもそも、有機体にとって必要な外界の情報を得るための機能であるのだから、医学的・生理学的な脳操作によって生じた感覚は知覚の役割を果たしていないと言える。外界を経由した脳操作の方こそが本来の知覚のあり方であると言えよう。また、日常生活においては、ある特定の感覚質だけを生じさせようと外界に働き掛けること

は、かなり稀で人工的なことである。我々は、たとえある感覚質に注意を止めることがあっても、そこから直ちに探索的な知覚活動を開始するのであり、知覚とは常に運動的側面を伴った認識活動に他ならない。知覚主体自身による運動的過程を伴っていない脳操作は、知覚（活動）とは呼べない。したがって、脳の操作によって発生した感覚は、一種の幻覚を越えないだろう。それはショートカットされた不本意な知覚に過ぎないのである。

このように知覚と感覚には重大な相違があるとは言え、脳（細胞）を操作し、そこに複雑な構造を成立させることで感覚質という現象を出現させることはできる。ある脳状態がある感覚質を発生させる十分条件であるとも言えよう。とするならば、その構造と発生する質（現象）のあいだには、上でバシュラールが述べたような、「飛躍」あるいは「断絶」が存在すると考えるべきではないだろうか。物質・物体の方は端的に実体であり、感覚質の方はそれとはまるきり異なる幻のような現象と考えたときに、心身の断絶感が始まると思われる。しかし、これまで見てきたように、バシュラールによれば、物質・物体の方も、下部構造と現象の断絶的な階層を幾重にも含んでいる。断絶が存在するのは、脳と感覚質のあいだばかりではない。したがって、脳が確かな実体で、感覚質を幻じみた現象として扱うのは、電子が実在物で化学的性質は幻と見做すことのように恣意的である。実体概念へのこだわりは、バシュラールによれば科学的な発想ではなく、むしろ、手に取って扱えるという原初的な身体感覚の反映なのである (FES:Ch.6)。

また、「赤」や「甘さ」といった感覚質も、心理現象としてもっとも高度なわけではない。色彩を組み合わせ、あるパターンを作り出すことで「ゴッホ的な強烈さ」といった質を生み出すこともできれば、さまざまな味や口腔的触感を組み合わせることで「まったりした味」というより高度な質をつくりだせるからである。この高度な質をひとつのまとまりとして

直感的に捉えられるようになる過程は、新しい言葉の習得と似ている。初めて聞いた言葉は、いくつかの文によって長々と定義してもらわねば理解できないが、それも聞きなれるにつれ、さまざまな文がひとまとまりの意味をなしはじめ、最後にはひとつの単語として直感的に理解されるようになるのである。文と単語の次元が異なるように、これらのより高度な感覚質も或る単一の質として与えられ、やはり下部構造を担うより単純な質とは次元が異なっている。したがって、「合成」によって新たな性質が生まれるということは、いわゆる「物理的なもの」と「心的なもの」を貫いている原則であり、その意味で両者は連続的なものと見なすことができよう。

ところで、先に私は、脳を操作し、そこに複雑な構造を成立させることで感覚質という現象が出現すると主張した。ただ、これに対して次のような反論が予想される。確かに、脳に対してある種の操作を加えることで感覚質を発生させることができるだろうし、また、それを自ら何らかの仕方ですることもできるだろう。しかし、通常、感覚質は、外から刺激を受けるなりして極めて受動的に、すなわち人為的な操作なしに発生する。つまり、感覚質は常に人為的な操作によって生じているわけではない。それをバシュラールの「現象工学」的過程、すなわち操作的・工学的な過程と類比的に語るのはおかしいではないか、と。そこで、私は、この下部構造の形成と現象とのあいだの関係を、操作的・工学的と見る代りに、因果的と見なすことを提案する。もちろんここで言う「因果」とは、先の区別での「因果性(2)」を指す。擬人性すなわち行為的な意味を取り除いた因果性概念は、外界からの何らかの非人為的な影響によって受動的に感覚質が発生する場合にも、また、人が何かの形で操作的に感覚質を発生させた場合にも、両方に使える概念だからである。つまり、人為的であれ非人為的であれ、何らかの影響によって脳にある下部構造ができ、それによって感覚質が生じると説明したい。「何らかの影響によって下部構造



が成立すること」が原因であり、結果が「感覚質の発生」となる。この主張に関しても、バッシュラールの見解を応用してみることにする。

まず、バッシュラールは、因果性と決定論が異なる原理であることを強調する。原因を求める心理は、普通考えられているほど、決定論の基準を求めているわけではない。「因果性は決定論よりも、もっとずっと一般的なものである。因果性は定性的秩序にぞくし、一方、決定論は定量的秩序にぞくするのである。熱が物体を膨張させたり、その色を変化させたりするとき、現象は確実に原因を教えるが、しかし、決定論を証明しはしない (NES:127)」。このように因果性は質の階層を認めるのである (AR:218-222)。因果性はむしろ定性的な概念であることから、私は因果説を主張したいのである。

先に我々は、因果概念を分析したのであるが、そこで、条件文で書かれる因果性 (2) によって感覚質と身体の関係の説明しても、なんら概念的な「違和感」がないことを確認した。この因果性 (2) を、これまで述べてきた感覚質の下部構造が成立するための諸条件を記述したものと考えてみよう（もちろん因果性は、それら諸条件の一部に焦点を当てたものに他ならないが）。ある身体的な諸条件が整えられれば感覚質は発生する。しかし、その諸条件とは、下位の対象を構造的に関連づける（合成する）仕方のことであり、その諸条件（あるいは諸条件を整えるために操作する諸対象）と発生する現象とは質的に異なるのである。お望みなら、ここでは、身体（脳）が感覚を「生み出す」という表現を用いることができるが、生み出すものと生み出されるものは、なんら類似していないのである。やはり、ラッセルも、「原因と結果は、多かれ少なかれ相互に似ていなければならない」という主張が、「不当に単純化された因果律を仮定している」として因果概念 (1) の素朴さを批判しているが (Russell:217f.)、ここでもそう言えるのである。

## 5. 結論と考察

これまで、因果概念の検討と現象工学の応用によって、感覚質が身体（とくに脳）から因果的に生じることを主張してきた。その意図は、最初に述べたように、感覚質を「自然化」することにあるのだが、それを、因果概念から擬人性を除き、自然を実体の集合と考える習慣を放棄することによって達成しようとしたわけである。言い換えれば、因果概念の意味を極めて弱く取り、非実体論的世界観を採用することで、感覚質を自然的な世界に組み込もうとしたのである。

先に述べたように、堅固な手ごたえをもった実体の集合と見なされた自然のなかに感覚質を組み込もうとすると、たちまち概念的な違和感が生じる。私が言いたいのは、本論で提示したような「弱い自然化」以上のことをすれば、感覚質は永遠に不可解な「主観的性質」であることをやめないだろうということである。繰り返すように、問題は我々の根深い実体論的臆見にあると思われる。物理的実体である脳に、幽霊のような感覚質が生じると考えたときに問題が生じるのである。しかし、先に触れたように、この「実体-非実体」の区別は、どこかで、手に取って扱えるという印象に根差していないだろうか。すなわち、実体とは「操作可能な対象」の謂ではないだろうか。確かに、感覚質そのものは操作できない。しかし、物理的対象の属性と見なされている性質も、やはりそれ自体を操作することはできないのである。心身問題の解決には、実体さらに実在の概念の再検討が必要である。

以上の提案が、心身問題への何らかの貢献となっているかどうかは、反論を待たねばならない。しかし、これまでの考察で、身体という物体と感覚質のあいだの隔たりは、少しは減じられたように思われる。また、ここでの基本的な構想は、ライルの「カテゴリー錯誤」や、メルロ＝ポンティの「行動の構造」とあまり変わりがないかもしれない (Ryle, Merleau-

Ponty). 本論文は、彼らが行動について言ったことを感覚質に適用することだったとも言えよう。

一方，以上の議論で論じ残したのは，次の二点である．ひとつ目は，感覚質が脳構造から生じるとして，どうして我々は，「赤」を外部にあるものとして感じるのか，といった感覚の空間的定位の問題である．これについて，私は，ある感覚(Q)は，ある場所(T)に感じるという仕方で，感覚主体(S)に生じる，という表現を採用したい．この質の空間的な定位に関しては，フッサールやメルロ＝ポンティによる現象学的研究が有効であると思われる．二つ目は，感覚質における他者問題である．すなわち，目の前に存在する他者の脳を操作して，他者に感覚質，例えば，赤の感覚を発生することはできる．それは他者の言語的・運動的反応から確認できよう．しかし，そうしたところで，私には視覚に与えられる燃えるような色は，一向に現れない．私に赤の感覚を生じさせるには，私の脳を操作しなければならない．脳ではなく，いわゆる外的対象を操作するのならば，他者にも共通して「赤」の感覚質を発生させることはできよう．しかし，その場合でも，赤がまさに感じる色として現れるのは，私にとってだけであるように（一見）思われる．この問題は，いわゆる「他者問題」であり，感覚質問題にとって，もう一つの中心をなす謎である．いわゆる「感覚質の逆転」の問題などは，他者問題である．しかし，これを論ずるには，あらためて別の機会を待ちたい．

#### 後 注

- (1) 本論は，三田哲学会 97 年例会哲学倫理学部門（1997/10/25，於慶応義塾大学三田キャンパス）での発表を手直したものである．その時に有益な質問を下さった千葉恵氏，服部裕幸氏，梅津光弘氏にはこの場を借りて謝辞を申し上げたい．
- (2) 邦訳書では「技法の現象学」と翻訳されているが，ここでは「現象工学」に統一する．

参 考 文 献

Anscombe, G. E. M. *Metaphysics and the Philosophy of Mind*. Oxford: Basil Blackwell, 1981.

Bachelard, Gaston.

VR: *La Valeur inductive de la Relativité*. Paris: J. Vrin, 1929.

NM: 「本体とミクロ物理学」『エチュード：初期認識論集』及川馥訳，法政大学出版局，1989年（原典1931年）。

IA: 『原子と直観』 豊田彰訳，国文社，1977年（原典1933年）。

NES: 『新しい科学的精神』 関根克彦訳，中央公論社，1976年（原典1934年）。

FES: 『科学的精神の形成：客観的認識の精神分析のために』 及川馥・小井戸光彦訳，国文社，1975年（原典1938年）。

PN: 『否定の哲学』 中村雄二郎・遠山博雄訳，白水社，1978年（原典1940年）。

AR: *L'activité rationaliste de la physique contemporaine*. Paris: PUF, 1951.

金森 修『バシュラール—科学と詩』講談社，1996年。

河本英夫・一ノ瀬正樹編『真理への反逆—知識と行為の哲学』富士書店，1994年。

Mackie, J. L. *The Cement of Universe*. London: Clarendon Press, 1974.

Merleau-Ponty, Maurice. 『行動の構造』 滝浦静雄・木田元訳，みすず書房，1964年。

Metzinger, Thomas, ed. *Conscious Experience*. Laurence, Kansas: Schoen- ingh/Imprint Academic, 1995.

Nagel, Thomas. 『コウモリであるとはどのようなことか』 永井均訳，勁草書房，1989年。

信原幸弘「心の哲学と認知科学」『分析哲学とプラグマティズム』（岩波講座現代思想7），岩波書店，1994年。

Sosa, Ernest & Michael Tooley, ed. *Causation*. New York: Oxford UP, 1993.

Reichenbach, Hans. 『科学哲学の形成』 市井三郎訳，みすず書房，1954年。

Russell, Bertand. 『神秘主義と論理』 江森巳之助訳，みすず書房，1959年。

Ryle, Gilbert. 『心の概念』 坂本百大・宮本治子・服部裕幸訳，みすず書房，1987年。

Searle, John. *The Rediscovery of the Mind*. Cambridge, Mass/London, MIT Press, 1992.

土屋 俊『心の科学は可能か』東京大学出版会，1986年。

Tye, Michael. *Ten Problems of Consciousness: A Representational Theory of*

「感覚質」問題について：G. バシュラルの「現象工学」の観点から

*the Phenomenal Mind*. Cambridge/London: MIT Press, 1995.

Wright, Henrich von. 『説明と理解』丸山高司・木岡伸夫訳，産業図書，1984年.